



TITLE:

キルソン山天文臺の詩

AUTHOR(S):

CITATION:

キルソン山天文臺の詩. 星 1929, 1: 8-15

ISSUE DATE:

1929-12-25

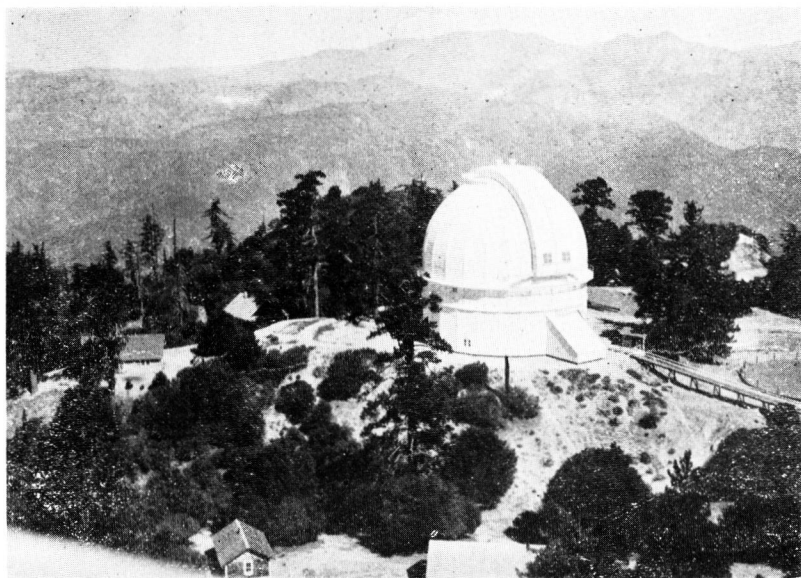
URL:

<http://hdl.handle.net/2433/168976>

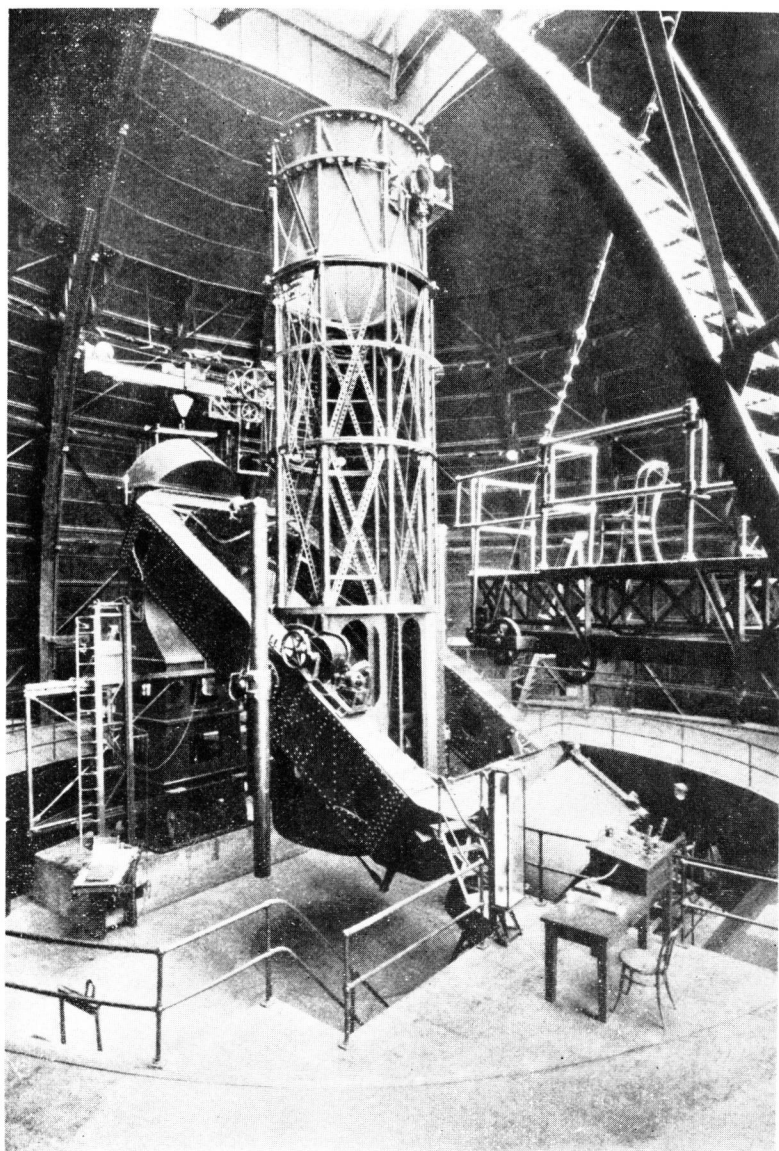
RIGHT:

キルソン山天文臺の詩

ひるなかは、^{むらさき}紫にかすむ山の上、
 松の樹や雲を超へて、かがやく、
 ちつ小ぼけな、白い、^{たまから}卵殻のやうなドーム——
^{はね}羽が生へて飛び去つた^{みそさへ}鷗 鴎 に置き忘れられたか。
 夜には、それが天軍たちの仲間入りをし、
 その不變の光を以つて、^{ひこ}一つの星になる。
 小さく、はるけき、針の尖ほぎの光、
 空間を通して送るその微かな音づれは、
 それ等を全く消して了ひさうに見えて、
 實は微塵も弱める力のない暗黒界よりも、
 見る眼には意義は更に深い。天に高く輝きつつ。
 人の探求心より出でし總ての思想こ



キルソン山天文臺の「百五十呎」高塔より見下した
 「百吋」大望遠鏡のドームと其の附近の景

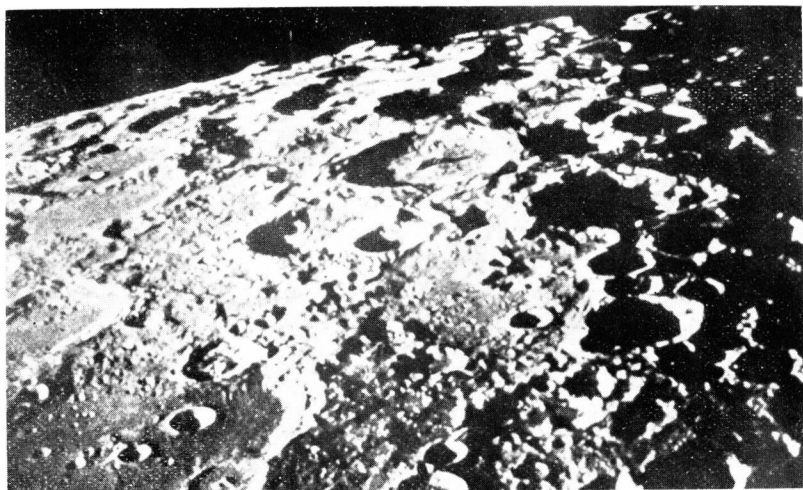


「百吋」大反射鏡

望みこ、夢こ、共に生く。——あの、上には
天空の探險者たち、理學の開拓者たちが
今、再び、かの暗黒を究め、
新しい世界を見出さうとしてゐる。
明晩、彼等は、過ぎし二十年の勤勞を飾るため、
人の造つた最高の、武器を、
空に向けんぞ望んでゐる。
戦時中、彼等は惡魔の武器を
作らされたため、こちらの業は遅れたけれど、
砲彈は之れを破壊しなかつた。



大「百吋」で撮つたオリオン星雲の偉容



「百吋」で見た月世界の光景

「明晩」——臺長の手紙——「吾々は」

新しい大望遠鏡、百吋、を試します。
 盲目の、老人の、あの有名なガリレオが
 牢屋の中で、共に天文を語つた以來、
 ミルトンの光筒は、能力が増大しました。

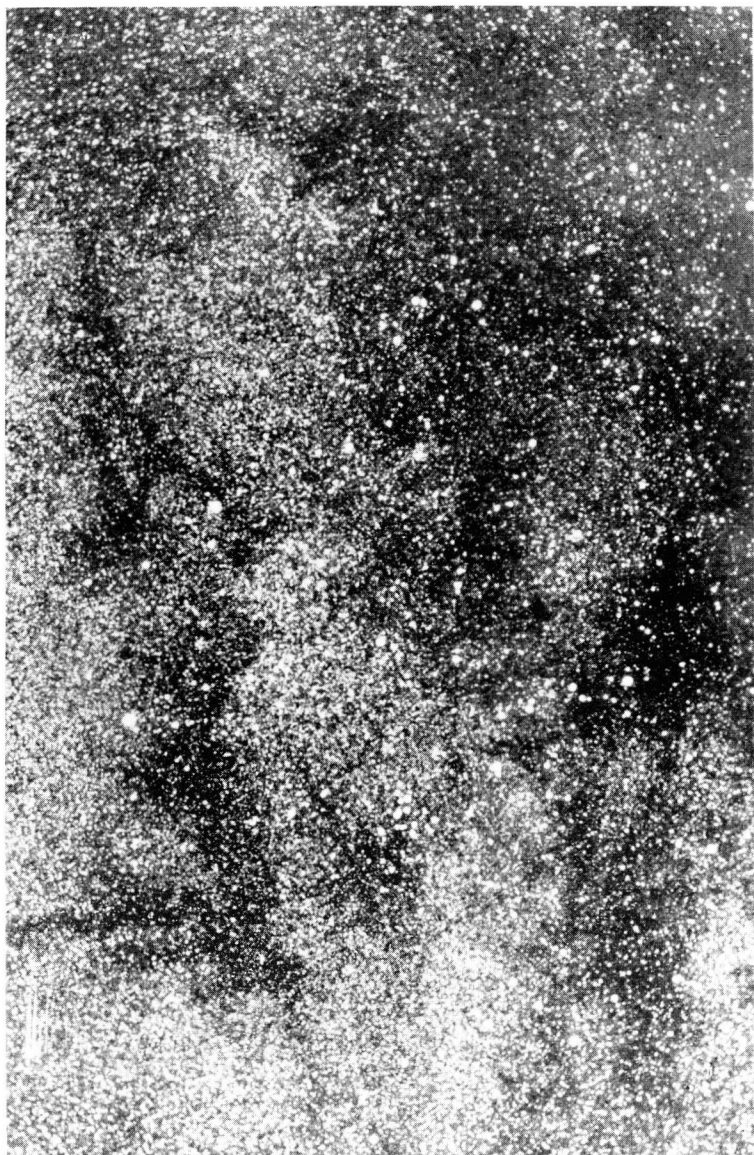
幾インチづつ一跳びに増し進んで、
 歐州は今尙かの大四十呎を誇つてゐます。

又、現に今夜も、わが古くからの六十吋は働いてゐます。
 ところが、今や吾が一百吋……全く、さうも、

此れがみんな新しい謎を見付け出すか分かりません。
 來給へ、明晩を星見て費し給へ、

この山の上で、若し、すべて好都合ならば、
 友よ、せめて、月が幾千哩もより近く、より珍しく、
 見えませう。嘗て、此の地球から、
 夢にでも、見た何時よりも。

星の方は、單に見えるさういふだけならば、
 三億ケの新しい光が見える積りです。しかし此れは
 言ひますまい。



「百吋」で見る「セフエ」星座附近の銀河宇宙

御承知の新聞、あれは一つの事を落しました、
世界のまはりに「三億ケ」が閃くこゝを。

おゝ明晩！ 二十年以上も、
彼等は考へ、計畫し、工作した。

かの、幾噸のガラス塊、百吋鏡、
澄みきつた、磨いた、無瑕の盤、

星の完全像を齎すべき——
それを造るのに十年は過ぎた。

一人の働き盛りの四分の一、或は其れ以上。
今でさへ、或る未知の瑕が、

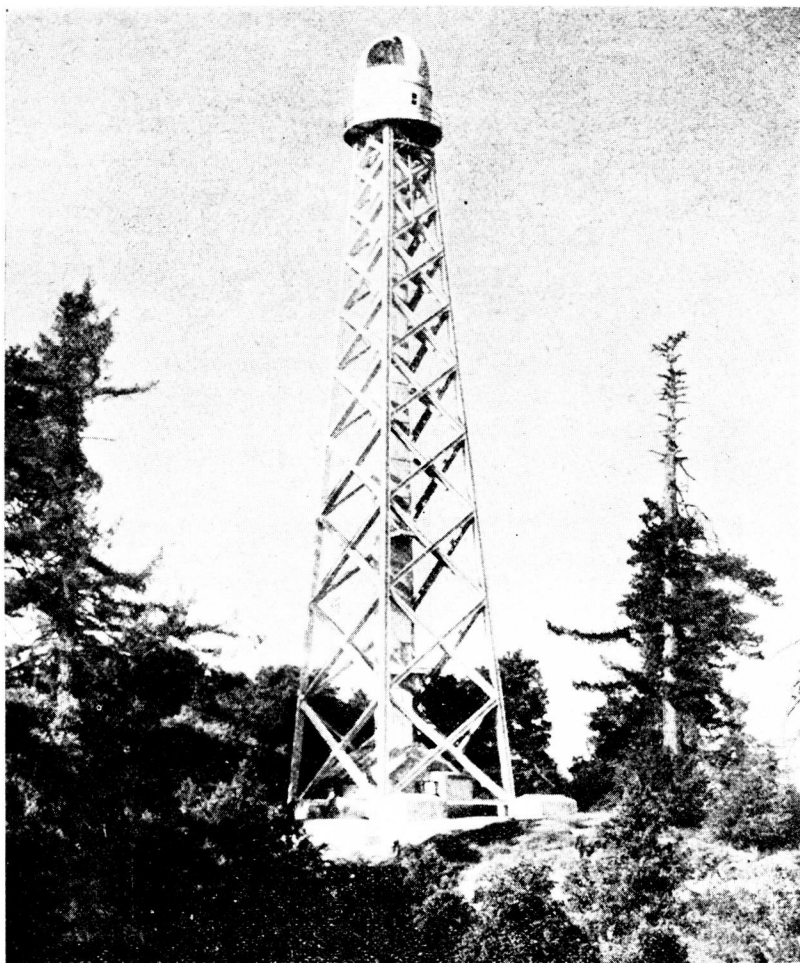


「はくてう」座のガス星雲

明日の試験に露はれて、總てを無効に
しないミ誰か言ひ得る。

時間ミ忍耐ミ財寶ミを一撃に賭けて、
これ程の大きな賭け^か者^てが何所にある？

其の價格——再び得られないもの
黄金に代へても、生命にかへても !!



世界一の高塔「百五十呎」望遠鏡

彼れ等の全き若さは、此の一つの
 事業の燃料に費えた。
 理學者の生涯に一度、
 馬鹿者共は其れを冷血と罵るこも、
 このドラマが來るのだ。若し失敗すれば、
 失敗は永遠である。少なくこも、彼れは
 新にやり直す時は無い。勿論、又、他の人が
 幾年も経て後、彼れの足跡を利用し、
 険しい絶壁を攀ちて、峯の頂きに到着するだらう、
 けれど、それを彼れは見得ない。それで、自分には
 此の手紙の簡単な言葉も、
 人の生命の熱情を語る如く見えて、
 この、喜悅と失望の分け目の機會に参加した。
 (つづく)

註——

此の詩は現代の詩人アルフレド・ノイエスがキル
 ソン山天文臺の「百吋」大反射鏡の始めて試運轉
 される日にヘール臺長から招待されて登山した時
 のこゝを唱つてゐるものである、